三月三日　二年連続の本町商店街の類焼火災で痛感したことだが、外側を簡易防火構造にすることで、さらに火は防げる。その方法を技術的に解明し、市役所の建設課と消防署で相談に応じているのだが実施は少ない。みなさんも一翼を担っている業種で、営業拡大にもなるのだから、大いに奨励してほしい。これは、県板金工業組合下越支部総会で私が述べたこと。

三月十日　稲荷神社の初午祭と開市神社の鎮火祈願祭に参列した。公職にある者が公式に宗教行事に参加するのは憲法違反だという。私はそれを承知で参加したが、わけがある。昔から葛塚には、初午の日に市を開くと大火事になるという言い伝えがある。十数年前のこと、町が管理する葛塚の庄屋遠藤七郎左衛門宗舜氏は、科学尊重の進歩主義者であり、郷土開発に大きな功績をあげた稀にみる行政家だと私は信じている。市民とともにその遺徳に浴し、安全を祈り、心新たにして住みよい町づくりに努めたいのである。

三月十一日　各土地改良区理事長とともに、明年度の農政予算陳情のため金沢市の北陸農政局へ行っていたとき、総務課長から電話で、八田健吉さんの死亡をきく。戦後、旧い政治体制と公職追放で日本が一新されたとき、八田さんは三十四歳の若さで、公選初代の葛塚町長に当選した。二期八年間に、白新線の開通、泰平橋のかけかえ、県下最初といわれた専用公民館建設、都市計画の決定、福島潟干拓や新井郷川排水機の構想と運動などに活躍し、町村合併で豊栄町が新設されたときは町長職務執行者であった。鋭い数理的能力、先見性、企業感覚をもった人で、豊栄市の今日の発展の基礎づくりをした大きな功労者というべきであろう。私は助役として、窮乏の中で夢をもち、行動を共にした思い出が多い。謹しんでご冥福を祈る。

三月十二日　長野市の信越郵政局へ出向き、郵便配達の遅れ解消のため、局員を増員するよう陳情した。

三月十七日　高森新田で今年十回目の火災発生。昨年同期は二回で、一年間で十六回。住宅全焼なし、という豊栄町誕生以来最高の成績だった。今年は件数が多いだけでなく既に住宅全焼が二回である。記念すべき年が最悪の年になってはたまらない。厳重なご注意を願いたい。

市長の日誌　石井新一

やあ!! おげんきですか

「年本番にして」

体育指導委員　佐藤　一さん

「ただ今から第八回豊栄市民運動会の入場行進を始めますので、選手役員は集合場所へお急ぎください」

八月の市民運動会になるときまって聞こえてくるウグイス嬢ならぬ軽快なあの声の持主――その人が佐藤さんです。

市の体育指導委員とは

「そうおげさのものではないんです。スポーツの振興を旗印にして、市民のスポーツ実技の指導や組織の育成、それにスポーツ行事や事業に協力することが主です。現在十二人いますが、おれなんかそれほどでないんです。年数ばっかくっている感じですねえ」

指導委員をやっていて、感想など

「個人的な意見になると思いますが、市の指導委員は、下越地区をみても、そう、ひけをとらないと思います。学校の先生方が六人、そして我々みたいなのが六人で、チームワークはいいです。しかもみんな、スポーツが好きですので、楽しくやっています。ただ、春や秋は、スポーツが盛んですので、行事が毎日曜続くことがありましてね、おれなんか農家でしょ、苗がのびてしまったり、収穫が遅れたり困ることがあります。その分、家内が難儀していますがね」

少し間をおいて

「豊栄は、保育所や公民館博物館など、そういう面では施設が整っていますが、スポーツ施設は不十分ですね。これは何も、施設がなければできないということではないと思いますが、やはり、施設なり、グランドなり、場所をつくってやることが先決だと思うんです。市民体育館が、いつときも早く実現することを望みます」

佐藤さんは、どんなスポーツを

「おれは、もう過去の人でしてね。高校を出てから走ったんです。木崎の青年団時代が全盛期でしょうかねえ。暇さえあれば、夜でも走っていました。今は、フォークダンス程度でしょうか」

いよいよ春本番ですね

「そうですね。この雪解けというか、冬から解放される時期は、雪国の人しか理解できないと思うんですよ。もう待ってましたという一言です自分にあったスポーツをどんどんやろうではありませんか」

佐藤さんは、下大谷内で農業を営んでおり、父母が他界し、家族五人の大黒柱です。木崎地区の青年団長から初代の豊栄町の青年団長となり、現在は、体育指導委員のほか公民館審議会委員、BBS会員、自治会の消防団役員、交通安全指導委員など、広い分野で活躍しています。三八歳

〝自分にあったスポーツをどんどんやりましょう〟と語る佐藤さん

土の出は語る（23）

鳥屋遺跡

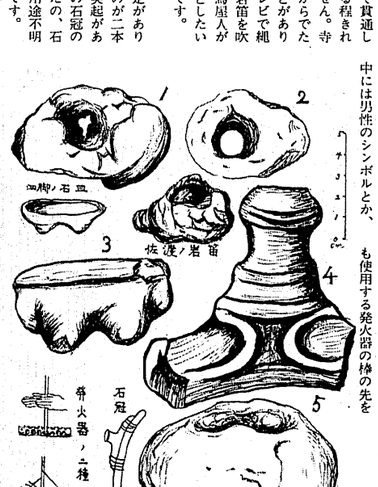
穴あき石（図1と2）川原の石の自然にあいた穴にわずかな人工を加えて貫通したもので、飾玉にする程きれいなものではありません。寺社の老人から、佐渡からでた岩笛をいただいたことがあります。又、この間テレビで縄文人の楽器として、岩笛を吹いて聞かせました。鳥屋人が月夜に楽しんだ岩笛としたいのですが無理のようです。

石の台（図3）上が平で下に四本の足がありそれに短い足状のものが二本づついて計八本の突起があります。北海道方面の石冠の一種だの、四脚石皿だの、石台だのと説があり、用途不明です。出土例はまれです。

石冠（図4）石のかんむり頭骨にかむせるようにしてあったというので石冠の名がつけられました。棒にくくりつけて武器にしたとか、ものをみがいたとか、斧にしたとか中には男性のシンボルとか、処女性破棄用具だとかの珍説を吐く学者もあります。まれにしか発見されません。

四石又は発火石（図5）自然石に凹をつけた石で、上に一つあれば必ず下に一つ、上に二つあれば下にも二つ穴があります。エスキモー人の土俗や、出雲大社などで現在も使用する発火器の梯の先を支えるものにあたるというので、発火器の名がつけられたこともあります。凹に指をあてるたたき石だとか、くるみを割る道具だとか用途は不明です。鳥屋でも五つ程発掘されましたが、ここに描いたのは上下左右の四面に、二つづつ凹のある珍しいものです。

―畠山　佑二記―



はーい

(12)　下大谷内橋

が、続いて語ってくれました

「この川はね、昔は細い農業用水路で、水はタラタラとしか流れていなかったんです要するに、水がある時しか流れてこなかったんです。それではいけないと、昭和十七年に大がかりに川の掘りこみが行われたんです。元請けは、確かほずみ組で、その下に鹿島建設がいたと思いますね。朝鮮人がいっぱいきましてね。親方は長井という人でした。

大谷内の岩崎さんのところを飯場宿にしましてね、それはもう、異様な空気でした。中には監獄の若衆も含まれていたという話でした。刑の軽い人が人夫としてきたんでしょう」

浜方面へ行く時、主に通るところから樋ノ入橋と呼ぶんで す。まあ、大谷内衆と樋ノ入衆の名前争いの橋ですね」

たまたま遊びにきていた佐藤勘助さん（樋ノ入、八三歳）

六之亟さんは懐かしそうに

「ほんね、今ごろになるとイトヨがいっぱい取れてねえ八貫匁ボテに四つも取れたんだからねえ。下流の権現山の近くに寺の山というところがあってね、その近くにヨウモツ小屋があったんだが、大水になると小屋が邪魔になるということで廃止になりました六尺、四尺のいけすが、川いっぱいにあったもんです」

さらに

「今の橋は、昭和三十一年三月三十一日に完成した橋ですが、以前は木橋で、はまやさんの前にあったんです。競馬場道路がなかったもんだから、木崎の役場、学校へ行くにも、大谷内の人は、みんなこの〝はまや橋〟を通ったんですれね」

写真は現在の下大谷内橋昭和三十一年に完成しました